

なぜアフリカに毛布を？

立正佼成会が取り組む平和活動の一つに、「アフリカへ毛布をおくる運動」がある。だがアフリカの現実を知らない多くの日本人にとって、その名称はなにか不自然だ。「そもそも灼熱の太陽が照りつけるアフリカに、なぜ毛布を送る必要があるのか…」そんな素朴な疑問をだれもが抱くのではないだろうか。

たしかにアフリカというと、日本人の感覚ではサハラ砂漠や野生動物が生息する草原地帯サバンナをイメージする 경우가多い。しかし、広大なアフリカ大陸は熱帯や砂漠地域ばかりではない。エチオピアやジブチ、ウガンダといった高原地帯では、昼夜の温度差が激しく、日中は30度を超える炎天ながらも、朝晩は0度近くにまで冷え込む地域もあるという。そのため高原地帯の住民にとって一枚の毛布は、日中には日除けや敷物となり、朝晩にはコートや寝具の役割を果たす非常に貴重な生活用品となっているのである。

「アフリカへ毛布をおくる運動」とは

この運動の発端は、アフリカの広い範囲を大干ばつが襲い甚大な被害をもたらした1984年にまで遡る。この干ばつで、エチオピアだけでも当時100万人以上の人びとが命を落としたと言われている。そうした危機的状況に、UNICEFは全世界に対して毛布200万枚の緊急支援を呼びかけ、これを受けて日本でも官民合同の支援活動として「アフリカへ毛布を送る会」が発足。日本全国から171万枚以上の毛布が寄せられ、エチオピアをはじめとするアフリカ各国へ届けられた。その後、当初の目的が達成されたとして同会は解散するが、現地では人々の生活環境が著しく改善したわけでも、毛布のニーズが治まったわけでもなかった。そのため、立正佼成会を含む国内のNGO（非政府機関）が新たに推進委員会を結成し、「送る会」の活動を継承。現在は、立正佼成会の他にAMDA社会開発機構、JHP・学校をつくる会、日本国際ボランティアセンター（JVC）が運動の推進母体となっている。

毎年4月から5月までの2ヵ月間にわたる運動期間中、立正佼成会の多くの教会では、戸別訪問や街頭でのPR活動、自治体の広報誌などを通じて市民に運動への協力を呼びかけ、毛布の回収作業にあたっている。26年におよぶ地道な活動によって、「アフリカで苦しむ人たちの思いに心を寄せてほしい」との願いは、会員はもとより教会周辺の地域住民、そして広く一般市民にも着実に浸透してきているという。これまでアフリカに送り届けられた毛布の数は累計390万枚以上。2010年度も約56,000枚が回収され、エチオピアやケニア、ウガンダなどアフリカの5ヵ国へ配付された。

また、それらの毛布は現在、自然災害による被災者や難民・国内避難民だけではなく、高齢者や身体障がい者、HIV感染者やエイズ患者など社会的立場の弱い人びとにまで届くよう、細心の配慮と努力がなされているという。

たしかに、途上国に物を送り、それが第三者の手に流れることなく本当に援助を必要としている人へ届けるためには、我々の想像以上の困難が伴うことだろう。ウガンダのカウンターパート（現地NGO）による毛布の配付作業を視察したある現

地調整員は、通関手続きの煩雑さや未整備な道路事情などをあげて、「その場にいなければ気づきもしないような苦勞をしていることが分かりました」と率直な感想を漏らしているほどだ。

そうした数多くの人たちの見えない協力の手によって地球を半周し、ようやく現地の人に毛布が手渡されることになる。1984年に干ばつと内戦のためスーダンへ逃れ、そこで日本から届いた毛布を初めて手にしたというエチオピア人男性は、いま一枚の毛布は食べ物に勝るとも劣らないほど貴重なものだと言っている。そして自身の体験から、「毛布のぬくもりは、エチオピアの人たちの心に、〈私たちは決して一人きりではない〉という思いを伝えてくれます。そしてその思いから、未来への希望が生まれてくるのです」と、毛布援助に対する思いを言葉にしている。

物資援助から広がる支え合いの輪

開発途上国に文房具や衣料、その他リサイクル物資等を送る国際協力は、草の根レベルできめ細かな対応が可能な市民組織が得意とする分野であろう。しかし一方で、そうした物資援助のあり方は、緊急支援の場合を除き、援助効率や受益者主権の観点から否定的に捉えられることもある。つまり、高額な輸送費を捻出してまで日本から物資を送る必要があるのか、それらを現地で生産したり、もしくは近隣諸国で調達できないのか、受益者に選択の機会はないのか、物資よりも資金援助のほうがより効率的ではないのか、などの指摘がしばしばなされてきたのである。

立正佼成会の担当部署でも、「毛布をおくる運動」の将来像を見据えてさまざまな観点から議論がなされているという。だが、これまで社会と同運動との橋渡し役を担ってきた一般会員や教会関係者は複雑な思いだ。「たしかに現地で調達すれば、効率もいいだろう。しかし、私の顔をみると『毛布は必要?』と言ってくる人もいるほど、地域では活動が定着してきている。毛布を通して人のつながりや、思いやりの輪ができています。」「毛布以外に輸送協力金として1,000円をいただいている。はたしてお金だけを送ろうとなったら、それだけの協力金が集まるだろうか。毛布があるからこそ、その気持ちが集まるのではないか。」「遠くの人の問題を、身近に思っ行動することが、どれだけ自分の人生を豊かにしてくれたか。その心を自分の家族や身近な人たちに、これからも映していきたい。」

たった一枚の毛布が、人々の心の扉を開ききっかけとなり、誰もが本来持ち合わせている「思いやり」や「共感」の心を引き出していく。そして、経済効率や費用対効果といった尺度では測ることのできない何かが運動を通して醸成され、それが人々の絆を強め信仰生活をより豊かにしているようだ。さまざまな今日的な課題を抱えながらも、地に足をつけた地道な一食平和運動の歩みが続けられている。

[参考資料]

「毛布にこめられた思い」『yakushin』佼成出版社、2004年5月、6月号。

「一食を捧げる運動」ウェブページ：<http://www.ichijiki.org/>

「アフリカへ毛布をおくる運動」ウェブページ：<http://www.mofu.org/>